

主の復活を知らされた女性たち

ルカ 24 : 1 - 10



司祭 ヨハネ 井田 泉

2019年4月21日

復活日

奈良基督教会にて

週の初めの日、つまり日曜日の明け方早く、女の人たちは準備しておいた香料を持ってイエスの墓に行きました。金曜日の夕方、主イエスのお体を十字架から降ろして急いで葬ったものですから、ほとんど汚れたままです。動かなくなったお体をせめてもきれいにしておけばよかったのでしょうか。

ところが女の人たちが墓に行ってみると、入り口を塞いであった石はわきに転がされており、中に入ったところイエスのご遺体がなくなっていました。途方にくれていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れました。彼女たちが恐れて顔を伏せると、二人は言いました。

「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。」ルカ 24:5
イエスは生きておられる、と言うのです。

困惑と恐れを感じつつ、このような意外な言葉を聞いたこの女性たちとは、どのような人たちだったのでしょうか。ルカ福音書をたどってみることにします。

イエスと同じくガリラヤを故郷とする女の人たちが多数、イエスに従っていました。ルカ福音書第8章にはこのように書かれています。

「8:1 イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。」
その後です。

「2 悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、3 ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」

ここでわかるのは、彼女たちがそれぞれに病や苦しみ、ひどい困難を抱えていた、ということです。イエスにすがった、すがりしかなかった人たちです。彼女たちは家を出て、イエスに従いました。イエスとの出会いから、彼女たちの新しい人生が始まりました。

この中に「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ」という女の人の名前が挙げられています。ヘロデ王家はイエスさま誕生のときにはヘロデ大王というのがいて権勢を振るっていましたが、その後はローマ帝国の力によって格下げされていました。それでもなお力を持っているヘロデ家の財産などを管理している家令クザという人の妻ヨハナがイエスの群れに加わっているのは、注意を引きます。ヨハナは夫クザを家に残してきたのでしょうか。それともクザ自身も、イエスの群れに身を投じたのでしょうか。そこは何ともわかりません。

ただ重要なことは、女性の地位が極めて低く、公的な役割を

担えなかったはずのその時代に、彼女たちがイエスの群れの中で積極的な役割を果たしていることです。

「8:2 彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」

ただイエスに救われて受け身で終わったのではなく、イエスの愛と教えに動かされて、自分の持っている物を提供し、イエスの一行に積極的に参加、奉仕していた。言い換えれば、イエスの宣教活動を物質的にも精神的にも支えていたのは、男性だけではなく、むしろこの女の人たちだった、ということです。

さてこの女の人たちは、イエスの身に迫る危険を感じつつ、イエスの最後のエルサレム入城に加わっていました。彼女たちはすでにイエスの受難予告を聞いて心配していたと同時に、ある種の決意をしていたでしょうから、群衆の熱狂的なイエスへの歓呼の叫びを聞いても、それに有頂天にはなりはしなかったでしょう。いよいよイエスが重大な危険に、はっきり言えば死に近づいておられることを感じて、どうしたらよいかはわからないままに、イエスのために祈っていたに違いありません。

数日して彼女たちの心配は現実となりました。木曜日の夕食を共にした後、彼女たちもイエスについてゲッセマネの園に行き、そこでイエスが捕らえられるのを目撃したかもしれません。

そしてその翌日の金曜日の朝、イエスは死刑場に連行されていきました。自分がかげられる十字架を背負わされてイエスが歩いて行くのを、彼女たちは群衆の中にまじって見つめながら、ついて行きました。

ルカ福音書は彼女たちの姿をはっきりと伝えています。

「23:27 民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。28 イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。『……わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。』」

イエスは傷つけられ、弱り果てながらも、自分に従ってくる彼女たちのことに気づき、気遣っておられました。イエスは振り向いて彼女たちに声をかけられたのです。

イエスは十字架にかけられ、午後 3 時頃、大声で叫ばれました。

「23:46 父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」

このイエスの最期の声は、はっきりとこの女の人たちに届いたはずです。

「48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。」

男の弟子たちはどこにいるのでしょうか。ここに立って、しっかりとイエスの最期を見つめて目に焼き付けているのは、ガリラヤから来た女の人たちなのです。彼女たちは確信しています。イエスは悪いことをしたから捕らえられて処刑されたのではない。反対に神さまに従い、人々を、とりわけ弱い立場の人たちを愛して正しいことをされたからこそ、捕らえられて処刑されたのだと。「**遠くに立って**」とありますが、立入制限があって距離的には遠かったのかもしれませんが。しかし思いにおいては、精神においては、彼女たちはイエスの間近にいた。イエスと思いと志を一つにしてしっかりと立っていたのです。

イエスが十字架に息を引き取られて、十字架から降ろされ、葬られる場面について、こう記されています。

「55 イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、56 家に帰って、香料と香油を準備した。」

ここでようやく今日の箇所につながります。

「24:5 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。『なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。6 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。7

人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。』8
そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。」

ガリラヤからエルサレム来てイエスの最期を見つめ、葬りと墓を見届けたのはこの女性たち。香料を用意してイエスの墓に來た彼女たち。これほどまでにイエスを愛した彼女たち。天使の言葉を聞いて、彼女たちは生前のイエスの言葉を思い出しました。まだ直接イエスと出会う経験はしていません。しかし現実起こった痛ましいことは、実はイエスが先に予告しておられたことなのだ。死んだけれども、殺されたけれども、生きておられる方イエスを、彼女たちは信じ始めています。

「9 彼女たちは墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話した。」

ここで今日の聖書日課は終わっているのですが、聖書本文はまだ続きます。

「婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。」

たわ言のように思われても、彼女たちはイエスを信じています。

このようにルカ福音書をたどって来ると、どんなに女の人たちがイエスの近くにいたか、またいようとしたかがわかります。彼女たちのそばに、復活のイエスはもう来ておられる。間もなく、彼女たちは驚きと喜びの再会を果たすのです。イエスは生きておられる。彼女たちを愛するがゆえに、イエスは死んだままにいるわけにはいかないのです。

復活のイエスと会うことは何にも代えられない、最高の喜びです。あるいはわたしたちはまだ明確に復活のイエスさまと出会っていないかもしれません。しかし大切にしましょう。イエスはわたしたちに会おうとして近くに来ておられる。わたしたちが嘆きや痛みを抱えているなら、イエスを信じて従おうと願うなら、復活のイエスはすでにそのわたしたちを見出しておられ、わたしたちに出会おうとしておられるのです。

主なる神さま、主イエスが復活して、今、わたしたちのために生きておられることに、わたしたちの目を開かせてください。困惑し、期待し、また迷うわたしたちに、生きておられる方を示してください。十字架に死んで復活された主イエスにこそ、わたしたちの希望と命があります。アーメン